

情報社会を生き抜く判断力を育む情報モラル教育

— SNS に焦点をあてた指導を通して —

情報モラル教育研究会議

和田 俊雄¹

鈴木 聡²

宮崎 誠³

古賀 勇樹⁴

要 約

平成 26 年 3 月に行われた川崎市情報モラル教育調査によると、SNS によるトラブルが小学校では 24.8%、中学校では 90.2%の割合で発生している。そのトラブルを未然に防ぎ、対処できるような児童生徒の判断力を育てることは喫緊の課題である。

情報モラルは、すべての小中学校の児童生徒が身に付けるべきものであり、学校教育全体で繰り返し指導することで定着が図られる。しかし、その必要性は分かっているにもかかわらず指導する範囲が広く、どこから何を指導すればよいのか迷ったり悩んだりする、という現場の声も少なくない。そこで、本研究では情報モラル教育のうち、特に SNS に関する指導に焦点をあて、情報社会を生き抜くための判断力の育成について検証した。

判断力を育む情報モラル教育においては、教師が情報社会の不易と流行を踏まえた指導をすることが重要である。そのために、情報社会の不易と流行を踏まえた指導事項を明確にした「日常モラル」と「仕組み(情報技術の特性)」の相互の関連を児童生徒にとらえさせることが判断力の育成につながると考え、学習活動に取り入れることとした。

その結果、検証授業では、SNS に焦点をあてた指導を通して、状況に応じて考え判断し、SNS のよりよい使い方を考えている様子を学習活動の中で多く見ることができた。

また、児童生徒が状況に応じて判断する学習を主体的に進める姿や、変容した姿が見られたこと、さらに授業後のアンケート結果から、本研究で取り組んだ SNS に焦点をあてた指導は、児童生徒の判断力を高めるために効果的であることが分かった。

キーワード：判断力 SNS に焦点をあてた指導 不易と流行 日常モラル 仕組み(情報技術の特性)

目 次

I 主題設定の理由	78	5 研究の方法	83
1 はじめに	78	6 検証授業の実際と考察	86
2 児童生徒を取り巻く状況	78	(1) A小学校3年生での実践	86
3 研究主題の設定	79	(2) B小学校4年生での実践	88
II 研究の内容	80	(3) C中学校2年生での実践	90
1 「情報社会を生き抜く判断力」とは	80	III 研究のまとめ	94
2 本研究が考える情報モラル教育の在り方	80	1 研究から見てきたこと	94
3 SNS に焦点をあてた指導について	81	2 今後の課題	95
4 年間を通して、授業をサポートする手立てについて	82	参考文献、指導助言者	96

¹川崎市立宮内中学校教諭(長期研究員)

²川崎市立下小田中小学校教諭(研究員)

³川崎市立平間小学校教諭(研究員)

⁴川崎市立井田中学校教諭(研究員)

I 主題設定の理由

1 はじめに

本研究を進めるに当たり、研究員とともに情報モラルに関する小中学校の現状や課題を振り返った。その話し合いの中で、共通する課題として、次の4点が挙げられた。

- ・ここ数年、携帯電話やスマートフォン¹（以下、携帯端末）の普及とともに、SNS²を利用したトラブル（LINE³に誹謗中傷などを書き込んだ、インターネット上に写真を載せてしまった等）が目立ってきている現状があるのではないか
- ・児童生徒は SNS を積極的に利用しているが、正しい使い方が分かっていないのではないか
- ・最近の携帯端末のトラブルへの対処や、児童生徒が使用する SNS やコミュニケーションアプリ⁴に対して、教師は理解しようとしているが、その理解が追いついていないのではないか
- ・教師は情報モラル教育の必要性を感じてはいるが、取り組み方に迷いがあるのではないか

こうした現状を改善するためには、近年、携帯端末を利用した SNS のトラブルが増加傾向にあることから、SNS を正しく利用するための情報モラル教育による判断力の育成が急務であると感じている。

本研究では、「情報モラルに関して、児童生徒が正しい知識と判断力を身に付けるためには、どのような手立てが有効なのか」という課題意識のもと、研究を進めていきたいと考えた。

2 児童生徒を取り巻く状況

(1) 社会的背景

現代社会は、急速に情報化が進展している。青少年のインターネット利用環境実態調査⁵では、青少年の携帯端末を通じたインターネット利用が常態化していることが示されている。

その調査では、携帯端末を所有する小学生の 44.3%、中学生の 82.1%が、インターネットを利用する中で SNS 等をコミュニケーションツールとして利用している実態が明らかになっている。

また、総務省の調査⁶(表1)によると、近年の ICT 利用の特徴として、SNS の利用者の急増に伴い、利用者が少なかった時の状況とは異なった影響も見られるようになってきた。インターネットの利用経験や情報リテラシー⁷が不足する状態の児童生徒が、携帯端末を利用することによって、個人情報の流出や著作権の侵害等に直面してしまう可能性が高まっている。それとともに、SNS での情報発信内容や SNS 内の人間関係に悩み負担に感じている児童生徒も少なくない。そのような社会的背景を原因として、小中学生における LINE 等の SNS によるいじめなどのトラブルの報道も絶えず、今後も増加するとみられている。

表1 青少年のソーシャルメディア利用に伴う負担感の上位5項目

1	自分が書いてしまった内容について、後から「あれで良かったか」などと悩む
2	自分の個人情報やプライベートな事柄をどこまで書いてよいものか悩む
3	ソーシャルメディア内の人間関係
4	自分の書いたメッセージに反応がないこと
5	他人の個人情報やプライベートな事柄をどこまで書いてよいものか悩む

(総務省(2013)「青少年のインターネット利用と依存傾向に関する調査」をもとに作成)

¹ タッチパネルで操作できる小型のコンピューター機能をもつ、多機能携帯電話。

² Social Networking Service (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) の略。人と人とのつながりを促進・サポートする、コミュニティ型の Web サイト。SNS の例としては、mixi、Twitter、Facebook などがある。

³ 世界 230 カ国で利用されている無料通話・無料メッセージアプリ。テキストメッセージやスタンプを使って、1対1でのトークや最大 100 名までのグループトークを楽しめる。そのほか、写真や位置情報などを送ることも可能。世界で 5 億 6 千万人、日本で 5200 万人(2014 年 10 月)が使用。

⁴ スマートフォンなどのモバイル端末を主な対象とし、友人や知人と手軽にコミュニケーションをとる機能を提供するアプリの総称。コミュニケーションアプリという呼び名は、特に LINE(株)が独自に提供する「LINE」において用いられている。

⁵ 内閣府 「平成 25 年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 調査結果(速報)」 平成 26 年 2 月

⁶ 総務省 「青少年のインターネット利用と依存傾向に関する調査結果」 2013 年

⁷ 情報機器や IT ネットワークを活用して、情報・データを管理、活用する能力。

(2) 川崎市立小中学校の SNS によるトラブルの現状

「川崎市立小中学校における情報モラル教育に関する調査⁸」(以下、市情報モラル教育調査)では、小学校では4校に1校、中学校では9割の学校で SNS に関する情報モラルの問題が発生している(図1)。

SNS によるトラブルの低年齢化傾向もみられ、SNS によるトラブルに対処したり、予防したりするための判断力の育成は、急務であると考えます。

(3) 川崎市立小中学校の現場のニーズ

これまで述べてきた、児童生徒を取り巻く現状から、全ての教員に、情報モラル教育についての指導が求められている。

その一方で、本市の情報モラル教育調査によると、90%以上の教員が情報モラルの研修に出たいと思っているが、忙しくて出られない現状もあることがわかった。

以上のことから、本研究では小中学生の携帯端末の所有率の上昇とともに、SNS のトラブルが増加している傾向に歯止めをかけるため、判断力を育成するための情報モラル教育について研究を進めた。

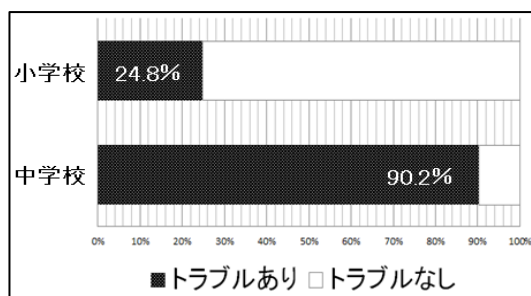


図1 SNS に関わる情報モラルの問題が発生した小中学校(平成26年3月現在)

3 研究主題の設定

(1) 本研究が目指す児童生徒の姿

図2に示したように、近年の情報機器やサービスの進化は著しいが、「情報化社会の新たな問題を考えるための教材指導の手引」⁹(以下、指導の手引)には、「情報モラルに関連した問題を検討してみると、技術やサービスは進化している反面、問題の構造はほとんど変化していない。」と示されている。

児童生徒が状況に応じて自身で判断して行動できる力の基となる、情報社会を生き抜く判断力の育成が重要である。

そこで本研究では、将来にわたり情報技術やサービスが進化したとしても、「状況に応じて主体的に正しい判断ができる児童生徒の姿」を目指して研究に取り組むことにした。

(2) 主題と副主題の設定

教育の情報化に関する手引¹⁰には、情報モラル教育において、ネットワーク上の有害情報や悪意のある情報発信など、情報化の影の部分への対応が喫緊に求められていると示されている。

ここまで述べてきた現状や緊急の課題、現場のニーズ等を踏まえると、情報モラル教育のうち、情報化の影の部分への対応の中でも、特にニーズが高い、SNS に焦点をあてた指導を通しての判断力の育成が必要であると考えた。

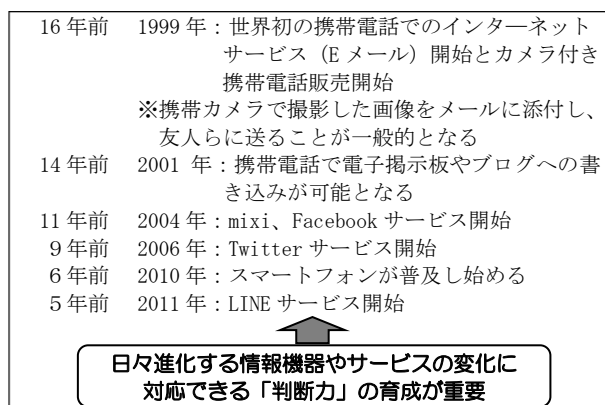


図2 情報機器やサービスの進化と本研究が目指す「判断力」

研究主題

情報社会を生き抜く判断力を育む情報モラル教育

～SNS に焦点をあてた指導を通して～

⁸ 川崎市総合教育センター 「平成25年度 情報モラル教育に関する調査」 平成26年3月実施

⁹ 原克彦他著 「文部科学省委託事業 情報化社会の新たな問題を考えるための教材～安全なインターネットの使い方を考える～ 指導の手引」 株式会社情報通信総合研究所 2014年3月

¹⁰ 教育の情報化に関する手引 「急速な情報化の進展」 文部科学省 平成22年10月 p.1

II 研究の内容

1 「情報社会を生き抜く判断力」とは

教育の情報化に関する手引¹¹には、情報モラルにおける判断力について、「道徳などで扱う日常生活におけるモラル（以下、日常モラル）」を前提とし、さらに「情報社会やネットワークの特性とその危険を知るのみがねらいではなく、ネットワークを通じて他人や社会とよりよい関係を築けるよう、自分自身で正しく活用するための的確な判断ができる力」であると示されている。

本研究では、「情報社会を生き抜く判断力」を以下のように定義した。

ネット社会において、ネットワークを通じて他人や社会とよりよい関係を築ける力

状況判断するために必要な日常モラルを前提とし、ネットワークを通じて人間関係をよりよく築く力を、授業を通して児童生徒に身につけさせる必要があると考えた。

例えば、図3のようなSNSの利用場面において「かわいくない」という書き込みに対して、相手の声がわからず文字だけを見ると、否定されたと思い、反発してしまいトラブルになることもある。

そこで、SNSの非対面性の問題点の一つである、言葉から相手の思いを読み取ることの難しさ等を児童生徒に気付かせ、学習させることで、図3の場面で、言葉を選んで返信することができるようになる。このように、状況に応じて判断する力は、SNSの利用を通して人間関係をよりよく築く力にもつながると考える。



図3 SNSの利用場面例

2 本研究が考える情報モラル教育の在り方

(1) 指導法の転換を目指した情報モラル教育

①これまでの指導法～事例重視と心情重視～

情報モラル教育のこれまでの指導法は、「これは危険、あれも危険」と多くの事例からルールを次々に教えるもの、または「こうなったら悲しむよ」と体験を通して心情に訴えかける指導法が多かった(図4)。一方で、危険な事例は多く、日々進化する新しいサービスも登場するので、それらすべての事例を網羅して教えるのは難しい。その理由として、「様々な問題があり過ぎて、どこから手をつけてよいかわからない」「情報モラルの指導に自信がない」と多くの先生方が述べている。こうした現状の改善のため、本研究では判断力を高めるためには、情報モラルの指導法の見直しが必要ではないかと考えた。

②これからの指導法～本研究が目指す情報モラル教育～

情報モラルの指導法について玉田は、情報モラル教育にはコツがあると述べている¹²。「まず、情報モラルは、その大半が日常モラルであり、それに加えて少しだけ情報技術の特性(基本的な仕組み)を理解しておくことが重要だということを理解して取り組むことが重要になる。」と示している。

情報モラル = 日常モラル + 情報技術の特性(基本的な仕組み)の理解

これらのことから、これまでの情報モラル教育の指導法の転換を目指し、児童生徒の判断力を高め

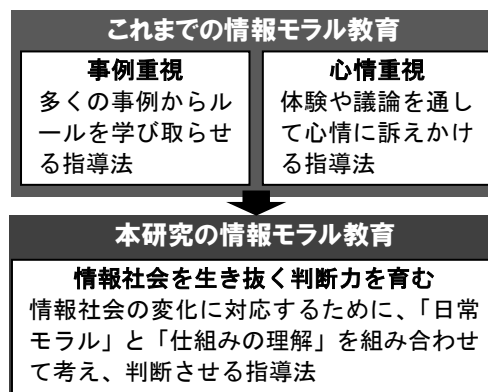


図4 情報モラル教育の現状と
本研究が目指す情報モラル教育

¹¹ 教育の情報化に関する手引 「1. 情報モラル指導の在り方」 文部科学省 平成22年10月 pp.117-118

¹² 原克彦、玉田和恵他 「情報化社会の新たな問題を考えるための教材」 株式会社情報通信総合研究所 2014年3月 p.20

る指導の手立てとして、指導内容を SNS に焦点をあてるとともに、情報技術の「不易（変化しない部分）」と「流行（変化する部分）」を踏まえた指導を取り入れることにした。

(2) 情報技術の特性を踏まえた情報モラル教育

原は、「情報技術の不易と流行を踏まえて、情報モラルの判断に必要な重要な要素を整理すると図5のようになる」と述べている¹³。

その中でも、情報モラル教育において判断力を育むには、日常モラルと情報技術の特性の中でも、最小限の仕組みを理解させ、それらを組み合わせる態度を育てることが重要であるとしている。また、原は「その態度を育てることで児童生徒がいろいろな問題に直面した際に児童生徒自身で適切な判断ができるようになるであろう」と述べている。それらを踏まえ、本研究では、日常モラルと仕組み（情報技術の特性）の理解を組み合わせる考え、判断する態度を育てる情報モラル教育を目指すことにした。また、特に指導にあたっては、情報技術の不易の特性を重視した。

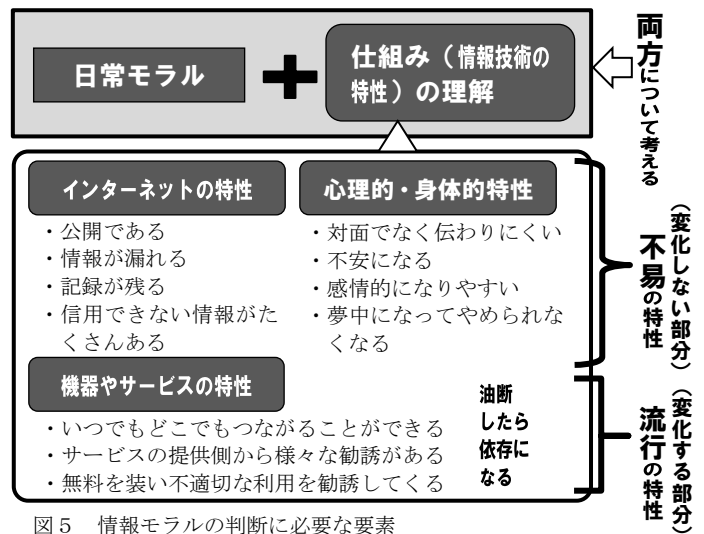


図5 情報モラルの判断に必要な要素
（原克彦他 2014年「情報化社会の新たな問題を考えるための教材」をもとに作成）

3 SNS に焦点をあてた指導について

(1) SNS に焦点をあてるとは

「市情報モラル教育調査」の「情報モラルに関するトラブルの内容」項目を分析すると、SNS によるトラブルの内容に共通点として二つあることがわかった（表3）。一つは、相手の気持ちを考えず、誹謗中傷や画像の拡散がもとでトラブルに発展してしまったことである。もう一つは、情報技術の特性の理解不足により、誹謗中傷や画像等が一度インターネット上に公開されると記録が残り、知らない相手に簡単に見られ、不特定多数に広まってしまい、深刻なトラブルに発展してしまう可能性があることである。本研究では、市立小中学校で起きた SNS におけるトラブルに共通する内容について、正しい判断ができることを目指した。

(2) SNS に焦点をあてた指導の内容とは

① SNS に焦点をあてた「日常モラル」を指導

これまで述べてきたとおり、「判断力」を育むためには、「日常モラル」と「仕組み（情報技術の特性）の理解」が必要である。とりわけ「日常モラル」について玉田は、「家庭教育や学校教育の道德教育等で学習者が身に付けてきた道德的な知識（人間として守るべきこと＝道德的規範知識）」であると述べている¹⁴。

本研究では、玉田が定義している「日常モラル＝道

表3 川崎市立小中学校で実際にあった SNS トラブルの記述（「市情報モラル教育調査」より一部抜粋）

小学校	
・LINE で友達の悪口を書いたことがばれ、脅された。	
・児童がスマホで撮影した他の児童の画像を LINE で流した。	
・LINE での誹謗中傷、悪口、情報流出。	
・ネット上に実名入りで動画をアップしてしまった。	
中学校	
・LINE による不確かな情報、根拠のないデマの流通。	
・LINE での誹謗中傷、悪口、外し、学校間トラブル。	
・SNS への書き込み（無断で写真使用・誹謗中傷・なりすまし）。	
・ブログ等にみんなまで撮った写真を載せて、一部を他人が使用。	

表4 道德的規範知識一覧

道德的知識	内容	具体的内容
自分自身に関わること	自律	自分の行動に責任をもつ
	思慮	正しいかどうか判断できる
他人との関わりに関する事	思いやり	相手の状況を考え思いやる気持ちをもつことができる
	礼儀	相手を不快にしないように気をつけられる
自然や崇高なものに関わること	命の大切さ	自他の命を大切にすることを
社会との関わりに関する事	正義	正しいことを実行できる
	規範	ルールや約束を守れる

（玉田和恵 江戸川大学(2014)「教師が習得すべき情報モラル指導内容の検討」をもとに作成）

¹³ 原克彦、玉田和恵他 「情報化社会の新たな問題を考えるための教材」 株式会社情報通信総合研究所 2014年3月 p.21

¹⁴ 玉田和恵「教師が習得すべき情報モラル指導内容の検討」p.10 情報モラル教育の本質的理解 2014年3月 江戸川大学情報教育研究所

徳的規範知識」を表4のように小中学校段階までに児童生徒が習得している道徳的知識として整理し、その知識を引き出して活用することで、判断力を育てることを試みることにした。

②SNSに焦点をあてた「仕組みの理解」を指導

情報モラルについて適切な判断を行うためには、児童生徒は日常モラルに加えて仕組みとして、「インターネットの特性」「心理的・身体的特性」「機器やサービスの特性」について理解しておく必要がある。本研究では、これまでに発生している様々な事件やトラブルの例を踏まえて、不易の部分である「インターネットの特性」「心理的・身体的特性」について、表5のようにSNSに焦点をあてた内容に整理した。また、表5のように整理した内容を発達段階に応じて理解をさせることで、より効果的に判断力を育むことができるのではないかと考え、検証を行った。

表5 SNSに焦点化した情報モラル教育における「仕組み（情報技術の特性）」の理解一覧

インターネットの特性に関わるもの			心理的特性に関わるもの
公開性	記録性	流出性	非対面性
友達同士だけのコミュニケーションではないこと。世界中の誰からでも見られる可能性がある感覚が必要。	一度発信した情報は、必ずどこかに記録が残ってしまう。名前を書いていなくても記録が残る。	インターネット上では、情報が広がる可能性や情報や写真が公開のサービスに転送される可能性がある。	直接顔を合わせていないため、真意が伝わりにくい。そのため不安や感情的になり易い。どんなに気を遣っても誤解やトラブルは生じる可能性がある。

本研究では、情報モラルに必要な判断の要素を中心に、教師が情報モラル教育に取り組みやすい実践を示すこととした。指導事項をSNSに焦点をあてた指導により、教師が授業のねらいをより明確にし、情報モラル教育に取り組むことで、児童生徒の判断力を効果的に育てることにつながると考え、検証を行うことにした。

4 年間を通して、授業をサポートする手立てについて

(1)「情報モラル年間指導どこで表」の活用を行う

表6 情報モラル年間指導どこで表(一部抜粋)

情報モラル教育は、多岐にわたりその範囲は広く、「情報モラル指導モデルカリキュラム表¹⁵⁾」や「情報モラル2領域5分野¹⁶⁾」を効果的に活用できず、児童生徒に身につけさせるべき項目をもれなく扱うことに追われて、漠然とした指導になったり、網羅的になったりする状況もある。また、実際に情報モラル教育を実践する場合、各領域の指導の扱いや情報モラル領域の全てを年間行事の中に組み込んでいく必要がある。さらに授業で扱い体系的に指導していくには、年間数時間の情報モラル教育だけでは判断力の育成は難しいと考える。

月	No.	行事など指導機会	対象	具体的な指導の例	Q&A対応項目
	1	入学式	児童生徒保護者	この学年で、生徒をとりまく情報社会は大きく変わりました。個人で簡単に写真や動画を撮って、世界中に公開できるようになりました。それに伴う問題も後を絶ちません。大人も子ども、正しい理解と判断力を身につけましょう。	インターネット
	2	入学式	児童生徒保護者	この式の写真やビデオをアップロードすると、不特定多数に学校名、学年、生徒と保護者の顔を公開することになりますが、それを望まない人もいます。個人情報の取り扱いには十分注意が必要です。	個人情報著作権
	3	1年生 登下校指導	児童生徒保護者	名札や付録者のゼッケンによって、学校と学年、名前が簡単に分かっただけです。学校と家の行き帰りに、名前が外から見えずにはいられないようにしましょう。また、友だちの名前や電話番号を聞かれても、答えたりはしません。	個人情報
	4	給食指導	児童生徒	アレルギーが強く出る人は、それが体の外や中に出てしまい、苦しんだり、時には命を落とすこともあります。それは、それが悪いのではありません。アレルギーで苦しむ友だちの気持ちを考えてみましょう。	-
4	5	健康診断 スポーツテスト	児童生徒	身長や体重など、すぐに変えられないことを気にする人はたくさんいます。人によって成長の仕方はそれぞれです。自分が気にしてはじめて、記録を人と比べて、不安な気持ちになる人もいます。むやみに人に尋ねるようなことは控えましょう。	-

そこで、本研究では情報モラル教育の授業をサポートし、学校教育の中で情報モラル教育に取り組みやすくするために、「情報モラル年間指導どこで表（以下、「どこで表）」¹⁷⁾を作成した（表6）。

「どこで表」は、情報モラルが指導できる場面等について「いつ」「どこで」「どんな内容を」指導

¹⁵⁾ 平成18年JAPET 情報モラル指導のカリキュラム内容を小中高一貫のモデルカリキュラムとして示したものの。例えば、5つの項目の下にある中目標の内容は、小学校1/2年生が6項目なのに対し、中学校は15項目が指導達成項目として示され、その内容は広範囲である。

¹⁶⁾ 平成23年国立教育政策研究所 児童生徒に身につけさせる情報モラル2領域5分野の内容を示している。2領域は「心を磨く領域」と「知恵を磨く領域」、5分野は「情報社会の倫理」「情報社会の法の遵守」「安全への知恵」「情報セキュリティ」「公共的なネットワーク社会の構築」を示している。

¹⁷⁾ 「どこで表」は「平成27年度版 5分でわかる情報モラルQ&A」に掲載する予定である。

すればよいか等をわかりやすくまとめたものである。

学級担任等がこの表を活用し、日常から情報モラル教育を意識して児童生徒に、継続して年間数回指導をすることで、情報モラルについて児童生徒の判断力向上が期待できる。

(2) 保護者との連携を行う

情報モラル教育を実践するにあたっては、保護者にも児童生徒が守るべきルール、マナー、危険から身を守るための注意事項を、理解してもらうことが重要である。「情報モラル指導実践キックオフガイド」¹⁸⁾には、その指針が示されている。それを踏まえ、「保護者との連携」を判断力育成の手立ての一つとして考えた。

まず、「保護者向けのアンケート¹⁹⁾」を作成実施した。そのアンケートは、保護者の情報モラルに対する関心の高さ等を調査する目的も兼ねている。

次に、学級通信を作成し、情報モラル教育の授業の内容やアンケート結果を保護者に知らせた(図6)。インターネットやSNSの利用が学校外で行われることを考えると、学校での指導には限界があり、保護者の協力が必要であることは明らかである。

学校での指導の現状と、指導内容等を保護者に伝え、親子で情報モラルを考えるきっかけ作りが必要である。実態調査を行い、その結果をもとに学級だより等での啓発を図り、学校と家庭が両輪となり指導していく体制づくりを目指した。

学校と保護者の連携により、SNSのトラブルや諸課題について情報を交換することで、より効果的な児童生徒の判断力育成につながると考える。

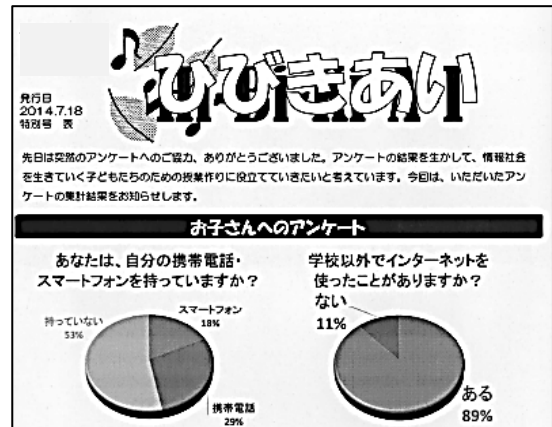


図6 アンケート後に配布した学級通信(一部)

5 研究の方法

(1) 検証授業を実施する時間について～「特別活動(学級活動の時間)」での検証授業実施～

小(中)学校学習指導要領総則解説編²⁰⁾には、情報モラル教育実施について「各教科等の指導に当たっては、児童(生徒)が情報モラルを身に付け」と示されている。しかし、学校現場では「いつ、どこで情報モラル教育を行ってよいかわからない」との声を聞くことが少なくない。そこで、本研究ではSNSに焦点をあてた指導を検証するに当たり、情報モラルの授業をどの時間で実施するのかを確認した。

先行研究においては、「道徳の時間」の中で情報モラルに関する指導に留意した実践が数多く行われてきた。学習指導要領総則編や道徳編、本市先行研究²¹⁾では、「道徳の時間」の中で、児童生徒の実態に応じて情報モラルに関する指導に留意して取り組むことが重要であるとしている。それにともない、道徳の時間での検証授業を考えたが、道徳の時間の特質²²⁾を踏まえると、本研究においては「情報モラルにおいて主体的に判断させ自己決定する学習場面」を検証する必要性から、特別活動(学級活動)の時間での検証を中心として行うこととした。第1回検証授業は中学校2年生「道徳の時間」で実施、

¹⁸⁾ 平成18年文部科学省委託事業『「情報モラル」指導実践キックオフガイド』には、保護者向け啓発活動の実践7項目について掲載されている。

¹⁹⁾ 平成26年度6月本研究会議で作成。家庭でのルールの有無や保護者がどれほど子どもがルールを守っているかを質問する。保護者の意識向上をねらいとする。

²⁰⁾ 平成20年 学習指導要領総則 文部科学省

²¹⁾ 平成20年度 川崎市総合教育センター研究紀要第22号 「学校における情報モラル教育の日常化を目指した研究」では、小中学校の取組みにおける有効な場面や実施が可能な時間を考え、「道徳の時間」を入口とした情報モラル教育の実践を行った。

²²⁾ 道徳の時間の特質とは、道徳的実践力の育成等があり、情報モラルを身につけさせるために道徳の時間があるわけではない。あくまで、情報モラルに関わる指導に留意して、道徳の時間のねらいを達成することが道徳の時間の特質としての一つであり、例えばインターネットの危険回避の方法やその際の行動の具体的な練習を行うことに主眼を置くのではないとしている。

その他の検証授業は全て「特別活動（学級活動の時間）」で行った。また、学級活動の時間のねらいとして、共通して「学級活動(2) 日常の生活や学習への適応及び健康安全(ウ) 望ましい人間関係の形成」とすることとした。なお、授業内容と情報モラルカリキュラム表との対応については、授業の題材ごとにねらいを決めて検証授業を行った。

(2) 検証方法の手順について

検証は、図7の①～④の手順で実施した。

① 児童生徒の情報モラルの実態を把握する

検証授業を行う学級において、児童生徒の情報

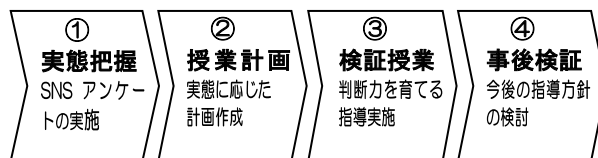


図7 検証の流れ

モラルについての実態を把握するために、本研究会議で作成した情報モラルアンケート²³（以下、アンケート）の実施を行った。このアンケートの結果を踏まえ、SNS に焦点をあてた指導の手立てをもとにして、児童生徒の実態に応じた指導計画を立て、検証授業を行った。

② 検証授業計画と実施時期の検討を行う

情報モラル教育は、各学校教育目標に応じた、各教科等年間指導計画に応じてあらかじめ計画されていることが望ましい。本研究では、それぞれの学校の実態に応じて検証を行う時期を検討し、情報モラルに関するトラブルが増加する傾向のある7月の夏休み

A 小学校3年生	第1回平成26年9月	第2回平成26年12月
B 小学校4年生	第1回平成26年6月	第2回平成26年11月
C 中学校2年生	第1回平成26年7月	第2回平成26年9月
	第3回平成26年12月	

図8 検証授業の実施時期

前後と、12月の冬休み前に小学校では2回、中学校では3回の検証授業を行った（図8）。

③ 検証授業の実施～特別活動（学級活動の時間）での授業展開モデル～

検証授業では、判断力を育てるための指導を行う「3つの学習場面」を設定し、検証を試みた（図9）。

学校現場は、児童生徒を取り巻く社会の変化から、対応せねばならない緊急の課題が山積みである。

とりわけ、その課題解決を担う時間の一つが「特別活動（学級活動の時間）」であるために、特別活動年間指導計画の中に情報モラル教育のための授業時間を何時間も計画することは現実的ではないと考えた。

その現状を踏まえ、本研究では「年間1～2時間で、担任を中心として、誰にでもできる情報モラル教育」を目指した。

そのために、図9のように、「特別活動（学級活動の時間）」での授業展開モデルを作成し、児童生徒の実態に応じて指導内容を工夫することで、判断力の育成につなげたいと考えた。

年間1～2時間の授業で行う情報モラル教育とともに、日常からできる情報モラル指導である「どこで表」を活用し、実施する。それらをもとにして、児童生徒の判断力の向上に効果的な指導について検討した。

学級活動の時間における判断力を育むための【3つの学習場面】

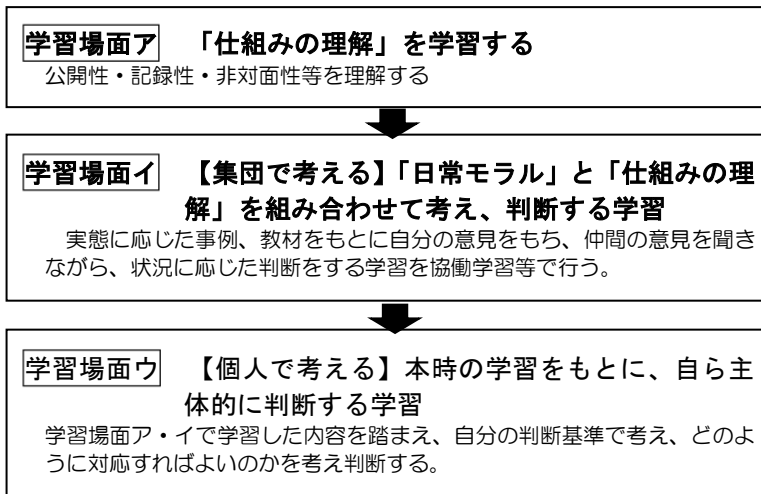


図9 本研究会が考えた「判断力を育成する」ための授業展開モデル

²³ 平成26年6月本研究会議で作成 文部科学省の『「情報モラル」指導実践キックオフガイド』p38、p39 情報モラルチェックシートを参考にし、市内小中学校の実態を考えて考案した。SNS利用者数の把握だけではなく、子どもたちの情報モラルについて、どの程度の理解があるかを調べるができる。

④事後検証を行う

これまで述べてきた判断力を育てるための「SNS に焦点をあてた指導」を試みた検証授業での児童生徒の反応や、ワークシートの記述内容等を分析考察した。そして、検証授業における3つの学習場面設定が、判断力の向上に効果的であったかどうかを検証した。また、検証授業前にアンケートを実施し、全ての検証終了後に事後アンケートを取ることで、判断力の高まりを検証した。さらに、その検証結果をもとに、次の検証授業に向けて、判断力育成の手立てについて検討した。

(3) 具体的な検証方法について

①判断力を育む「学習場面」を設定する

学習場面ア「仕組み」の理解を学習

- ・事前アンケートでの意識づけ
- ・児童生徒の実態に応じた教材の使用
- ・板書の工夫

図10 学習場面アを充実させる工夫

SNS に焦点をあてた「公開性・記録性・流出性・非対面性」を授業前半部分で理解させることをねらいとしている。そのための教材としては、情報モラル学習を「他人のこととしてではなく、自分のこととして自覚させる」ために、児童生徒の実態に応じたものを使用することが望ましいと考えた。本研究では、誰にでもできる授業を目指すためにできるだけ最新の既製の教材を中心に使用し、場合によっては自作教材の作成を試みた。また、児童生徒の理解を助けるために、「事前アンケートでの意識づけ」、「板書の工夫」等も行った(図10)。

学習場面イ【集団で考える】「日常モラル」と「仕組みの理解」を組み合わせ考え、判断する学習

本研究では、判断力の高まりを検証するために、学習場面イにおいて「日常モラル」と「仕組みの理解」を組み合わせ考え(図11)、最終的に「なぜ」「だから」「どうしたらよいだろう」と、児童生徒自らが主体的に考える場面を設定して、状況に応じた判断力の高まりについて検証を行うこととした。

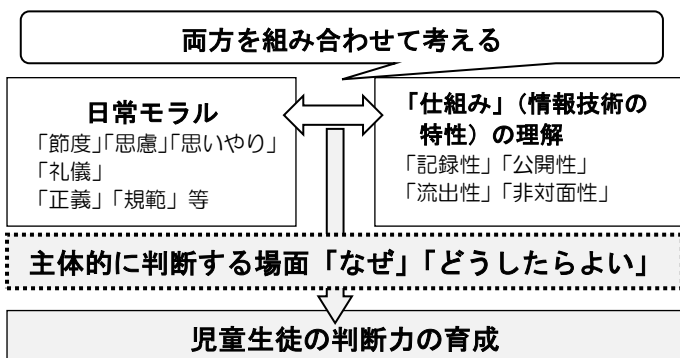


図11 授業において判断力育成のために組み合わせる考え

そのために、学習場面イではSNS利用において情報モラルの判断が必要な場面を設定した。その場面において、「日常モラル」のどこに問題があったのか、「仕組みの理解」について、どの特性と関連しているかを考えさせることで、最終的に自分だったらどう行動するかを考えることが、判断力の育成につながると考えた。

児童生徒の状況判断のもとになっている要素は様々であるが、それらの要素からまず判断させて、「どう思うか」、「自分ならどうするか」というそれぞれの考え方の違いがあることを、自分以外の他人から知ることが判断力の育成には欠かせない。自分の考えをグループで深める場面設定を行うことが、判断力を効果的に育むために有効であると考えた。

学習場面ウ【個人で考える】本時の学習をもとに、自ら主体的に判断する学習場面

授業の終末場面に、学習場面ア・イで学習した内容を踏まえ、自分の判断基準で考え、どのように対応すればよいかを考え、判断力を育成する手立てとして学習場面ウを設定した。その際、指導に留意した点は「SNSのよりよい利用法を考えさせる」という点である。

「判断力」を育む指導	
ダメだけを教える禁止指導	< よりよい使い方を考えさせる指導

本研究では判断力を育むためには、「禁止指導」から「よりよい使い方を考えさせる指導」をすることが大切だと考えた。これまでの情報モラル指導の現状は、インターネットの被害やトラブルから児童生徒を守る、「～すべき」「～はダメ」の危険回避的な指導が多いのではないだろうか。その指導は

往々にして、児童生徒が考える機会を奪い、思考停止を招くことにもなりかねない。一方で、以前に指導したいいわゆる「情報の光と影」の影の部分の現象が、情報化社会の流れの中で、将来的に消えて別の現象が現れたりする可能性がある。つまり、トラブル回避のために情報化の危険性のみを指導することは、必ずしも判断力の育成にはつながらないのではないだろうか。

従来の「トラブルのもとになるから、SNS を禁止しよう」という教師側の考え方を転換するためには、前述の「考え、判断させる場面」でよりよい使い方を考えさせ、その考えを生かす指導が有効ではないだろうか。もちろん、SNS の危険性を児童生徒に知識として身に付けさせることは大事である。本研究では、SNS の危険性と正しい使い方の両面を知ること、適正な判断力の育成につながると考える。また、そのような考え方がインターネットというネットワークを通じて、他人や社会とよりよい関係を築けるような判断ができる力につながっていく。

全ての検証授業では一貫して、「SNS を利用してはいけない」という禁止のみの指導は極力避けることにした。以上を踏まえ、授業の終末において、自ら判断し考えをまとめ、行動につなげることで判断力の高まりにつながると考え指導した。本研究では、以上の3つの学習場面で、SNS に焦点をあてた指導の手立てが有効かどうかを検証した。

②検証方法

「判断力を高める授業における学習場面ア～ウ」が、「授業中の発言・記述」「授業前後のアンケートの比較」等を用いて児童生徒の判断力を育むために有効であったかどうか検証を行った。

6 検証授業の実際と考察

(1)-①A 小学校3年生授業実践1

【題材】 SNS を使ってよりよいコミュニケーションをしよう

【題材設定の理由】 自分の意見を素直に言い合える児童が多い。一方で、相手の気持ちを考えて行動することが難しい児童もあり、思いやりについて日常的に指導をしてきた。SNS を利用したことがある児童は全体で3割程度であり、SNS を本格的に利用する前に、安全に正しく判断できる力の基礎を築いておきたい。そこで、「仕組みの理解」として、誤解によるトラブルの可能性を知るとともに、相手の立場や気持ちを思いやって情報発信することの大切さについて考えることを目標として、本題材を設定した。

学習場面ア 「仕組みの理解」を学習する場面

資料1 教材「指導の手引」の映像 資料2 板書の工夫

教材には、「指導の手引き」の映像を使用した。2014年にSNSのトラブル対策に特化して作られたこの教材は、児童のSNSの仕組みの理解に役立つのである(資料1)。



ただし、小学校高学年向けの内容であるため、中学年の児童が場面を確認しながら黒板でも視覚的に「仕組みの理解」が行えるような工夫をした(資料2)。SNSの便利な点である、すぐにメッセージが送れること、写真が送信できること、相手がメッセージを読んだかどうか分かる機能もあることなどを学習した。一方で、SNSの便利さは理解が進んだが、インターネットの特性のうち、非対面性の理解が難しく、児童が「相手が見えない状況」を想像することは発達段階の特徴としても難しいという壁にぶつかった。

学習場面イ 【集団で考える】「日常モラル」と「仕組みの理解」を組み合わせる考え、判断する学習場面

動画を題材として、「SNSのメッセージを相手に送ったが、すぐに返信がこないことでトラブルになってしまった」という場面を想定し、「トラブルの原因」と「メッセージ送信側と受信側の気持ち」を4人グループと学級全体で考えた。SNSが使用できない場面は次の3点が考えられる。

・使ってはいけない場所にいる ・使わない方がいい場所にいる ・使いたくても使えない状況にある

児童の発言やワークシートの記述からは、「レストランにいたから出られなかった」「寝ていた」「おでかけにいつているのでメールに出られない」「お母さんに取り上げられている」など、SNS が使用できない相手の場面を考えることができていた。これは「日常モラル」で、相手の状況を考えることにつながる。

そのことから、「仕組みの理解」において、SNS では相手が目の前にいる訳ではないので、相手の状況によっては SNS のメッセージ等が受け取れないことが多く、むしろその状況の方が多いたことを学んだ。メッセージを送る側は、そのことを大前提とすることでトラブルを防ぐことにつながる。また、メッセージを受信する側は、翌日に「すぐに返信できなかった理由を相手に伝えることで誤解を防ぐことができる」ということを理解する学習場面となった。

学習場面ウ【個人で考える】本時の学習をもとに、自ら主体的に判断する学習場面

「自分だったらどんなことに気をつけて、SNS をよりよく使うか」という課題を提示した。

児童の記述から、「写真をばらまかない。理由は色々な人のところに残るから」「家族のルールを伝えて、相手の気持ちも考える」「写真を見せるときは、写真のもちぬしに、いいかきく。」「もしもすぐに、メールを送れなかったら、その事情をしっかりと伝える。」など、日常モラルと仕組みの理解で考えている記述がみられた。さらに、組み合わせて考えるように工夫したが、そのような考えは出てこなかった。

(1) -②A 小学校 3 年生授業実践 2

【題材】うまく伝わったかな？

【題材設定の理由】12 月に入り、児童同士は仲良くなり、それぞれが多くの仲間たちと交流を持つようになってきた。一方で、特定のグループ内で遊ぶ姿も見られるようになり、相手の気持ちを考えず行動するコミュニケーションに起因するトラブルも多くなってきた。このような状況と SNS 利用の実態（ゲーム通信をしている児童が学級の大半を占めている）を考え、ゲーム機によるメッセージのやりとりを通じて、コミュニケーションの伝わりにくささを考え、直接対面してのコミュニケーションの大切さを学ぶことを目標として、本題材を設定した。

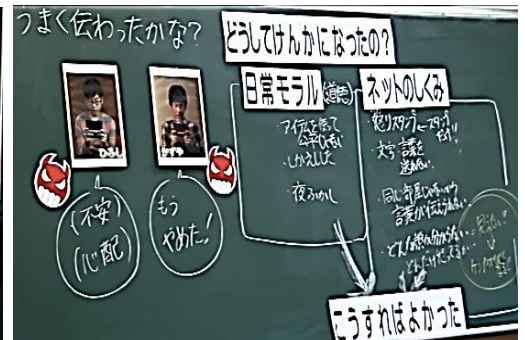
学習場面ア「仕組みの理解」を学習する場面

事前に、ゲーム機を利用したコミュニケーションについてのアンケートを実施した。その結果、ゲームで通信対戦をしたり、メッセージやスタンプを送ったりしたことがある児童が学級の大半を占めていた。その実態を踏まえ、教材には、「指導の手引き」

資料3 教材「指導の手引」の映像



資料4 登場人物の気持ちを考えた板書の記述



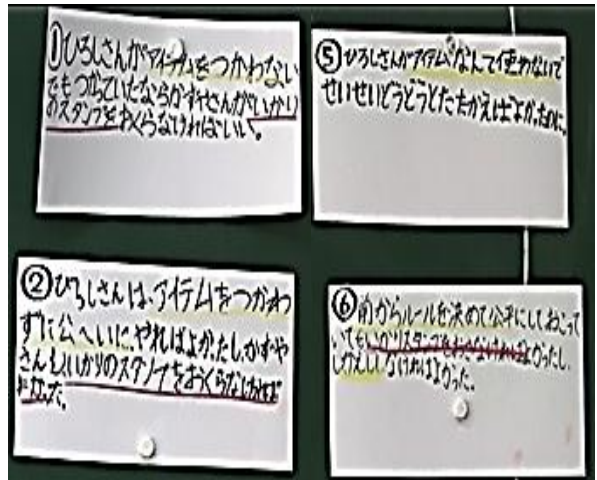
き」の中の、ゲームを通じた SNS 利用についての教材を「仕組みの理解」場面で活用した(資料3)。その内容は、主人公が通信対戦をしていた学級の友人に対して、相手が見えないことから感情的になり、怒りのスタンプをしつこく送ってしまい、気持ちのすれ違いから、翌日学校でトラブルに発展するというものである。

仕組みの理解では、「非対面性」の理解に重点を置いた。登場人物の気持ちを考える中で、「ゲームの相手が強いと腹が立つよ」「変なスタンプを送るのは良くないと思う」「明日学校で会ったときにどうしよう」など、非対面により、感情が揺れる発言がみられた(資料4)。これは、非対面性というのはどのような特性なのかを、考えることができたといえる。

学習場面イ【集団で考える】「日常モラル」と「仕組みの理解」を組み合わせて考え、判断する学習場面

「どうすればすれ違いが起きず、トラブルとならなかつたのだろうか」という話し合いを行った。4人グループで話し合い、考え判断する場面を設定した。それぞれのグループで考えた内容として、「いかりスタンプを送らなければいい」「しかえしをしなきゃよかった」「前からルールを決めて公平にしておく」など、相手の気持ちを考える大切さや、ルールを決めておくことの大切さ等を日常モラルで考え、判断していた 記述が多かった(資料5)。SNS として利用されるゲーム機の通信対戦においても、日常モラルをもとに考え、判断することは、トラブル回避につながると考える。

資料5 日常モラルで判断している場面(一部抜粋)



しかし、「相手が見えないために、感情的になりやすい」という非対面性等の「仕組み」で考え、判断する児童の発表がほとんどなかった。そこで、今後は「仕組み」を理解する手立てとして、ゲーム機の通信対戦において、なぜ、感情的になりやすいのかを考えさせ、学習させていく必要がある。

学習場面ウ【個人で考える】本時の学習をもとに、自ら主体的に判断する学習場面

個人で考える場面として、仕組みの理解を学習した場面と同じ状況で、もし自分だったらどのように対応するのかということを考え判断させた。

その記述の中には、「これからは、いかりを単純に伝えるスタンプを使わないように気をつけて、もしもできたら、くわしく自分がどう思っているかを伝えるように気をつける」「これからは相手に嫌な気持ちになるいかりスタンプや、途中でやめたりすることは、ぜったいにやらない。もし怒りスタンプなどをやられても気にしないで、やり返さない」「友達と対戦したことが僕はあります。それでケンカをしたことがあるので相手がいやなことはしないほうがいい」と、相手が見えない状況でも正しい判断をすることができている児童がほとんどであった。

一方で、「日常モラル」では考えられているが、「仕組みの理解」を組み合わせて考えている児童はほとんどなかった。それらをどう組み合わせて考えさせるかという、課題が残った。

(2)-①B 小学校 4 年生授業実践 1

【題材】運動会の写真～インターネットで画像を送るときには～

【題材設定の理由】5月に運動会を実施し、学級の団結力が高まってきた。一方で、学校生活以外の場面で、行事の写真や動画を友達同士が無断で送ることでトラブルになることもある時期である。そこで、インターネットや SNS では情報を公開すると、取り消すことが難しいことを知り、自分や相手の情報を大切に、むやみに公開してはいけないことが理解でき、自分や相手の情報を大切に、お互いを思いやることができるよう本題材を設定した。

学習場面ア「仕組みの理解」を学習する場面

実態調査の「SNS の利用経験がクラスで4人」という結果をもとにした教材を作成し、「仕組みの理解」を試みた。具体的には、検証授業実施1ヶ月前に学校行事で行われた運動会を題材(資料6)として、「運動会の写真をインターネット上の掲示板に載せてしまうとどうなる」という内容で授業を行った。インターネット上に、画像を一度公開してしまうと、誰

資料6 「仕組みの理解」につながる児童が身近に感じる題材の例

△△小学校はぼーりよくが OOくんです。すごく速いこわい。



これは、運動会でおきたけんかの写真です。みんなこんなきけん男の写真は、どんだんコピーして、たくさんの人にばらましよう。



コメント

1. 本当だ。すごく速いね。
2. OOくんていうんだね
3. かっこいいなあ
4. この写真、わたしももらうね。

児童が SNS の利用をしたことが少ないという実態から、「運動会」という身近に感じる題材を作成した。

でも簡単に「デジタルコピー」をされる可能性がある。「公開性」「記録性」「流出性」を「仕組みの理解」として児童に身に付けさせることが正しい判断のためには、欠かせない。

授業内容を児童の身近な話題とし、SNSのトラブルについて、当事者意識をもたせて主体的に学習させることで、判断力の育成につながるのではないかと考える。

学習場面イ【集団で考える】「日常モラル」と「仕組みの理解」を組み合わせて考え、判断する学習場面

本実践では、4人で話し合う活動を重視した。検証授業では、それぞれの児童の様々な日常モラルを児童同士で交流しながら学習を進めている様子が見えた。

検証授業の発問場面、「掲示板に写真を載せられて、悪口の書き込みを防ぐために、相手にどう断れば良かったか」では、実際に起こりうる状況でどのように判断したらよいかという実践を行った。

資料7 あるグループの活動の様子（一部抜粋）

<p>Aグループ</p> <p>C1 じゃあさ やめてって言う</p> <p>C2 でもその子が送ったかわかんないじゃん</p> <p>C1 何で</p> <p>C3 あー</p> <p>C2 その子が送ったりしてて</p> <p>C3 誰が</p> <p>C2 犯人がわかんない</p> <p>C1 どうやって止めればいいのか</p>	<p>Bグループ</p> <p>C1 まず写真を送るまで？</p> <p>C2 写真を見せるまでに？</p> <p>C3 写真を送ってよっていいときに 無理とか 何でとか 言えばいいじゃん</p> <p>C2 じゃあ その時の写真送ってよって言ってきたら？</p>
<p>C2が経験を踏まえ周囲に「仕組み」を伝えて学びを深めている。</p>	<p>C3が日常モラルを踏まえて、本時に学んだ「仕組み」を関連付けて話し合いをしている。C2もその意見に共感し、疑問を解決している。</p>

集団で考え意見を出し合うことで、資料7のような日常モラルと仕組みの理解を組み合わせて考えるという実践場面では、児童の判断力を育む場面設定につながったと考える。一方では、多様な意見交流の中で、「SNSは使いたくない」という言葉も見られた。これは、「SNSはトラブルの原因にもなる」というだけを伝えた指導に問題があったからだと考える。本研究では、SNSのよりよい使い方を考えさせる指導を目指している。そこで、今後は、「悪口を書き込まれるという危険性」とともに、「こうすればよかったという可能性」についても指導していく必要がある。

学習場面ウ【個人で考える】本時の学習をもとに、自ら主体的に判断する学習場面

事前調査の段階では、「SNSを使うときにどんなことに、気を付けていますか」という項目で、26名中の8名が「相手に対して悪口を言わない」等の内容で、1名が「写真を送る時は気を付ける」と回答し、9名がSNSの利用の仕方について一部ではあるが理解をしていた。

今回の学習では、「写真を送らない理由」と「SNSのよい使い方」について考えさせた。その結果、26名中の25名の「日常モラル」と「仕組みの理解」を組み合わせて考えた記述が見られた(資料8)。

資料8 「日常モラル」と「仕組みの理解」を組み合わせた記述

C1 言ったらみんなにバカにされたり、いじめたりされるから、SNS、インターネットにのせる場合は、いいコメントをのせる。
C2 もしバカにされるといやな言葉が、いっぱい出るといだから、もし写真を送ってって言われたらみんなに広げないでって言う。
C3 言ったらみんなにうわさされたり、ばかにされるから、わる口をいったり相手がいやな気持ちをかかない。

- ・掲示板に悪口を載せるのはなぜか。「日常モラル」を生かした理由の記入が、児童の記述から読み取れた。
- ・写真をSNS上に載せるとどうなるかを理解していることが、まとめの記述から読み取れた。

これらの記述から、本検証授業で行ったSNSに焦点をあてた指導は、判断力の育成につながるものである、といえるのではないだろうか。

(2)-②B小学校4年生授業実践2

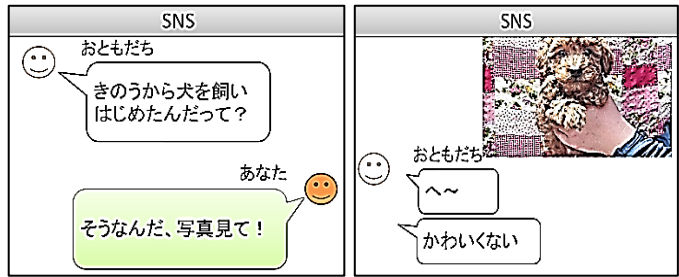
【題材】SNSを使ってよりよいコミュニケーションをしよう

【題材設定の理由】4年生後半に入り、自主的に考え行動することのできる児童が増えている。一方で、自分の利害に基づく衝突が強くなることを見受けられる時期であり、日常的にSNSを通しての関りは少ないものの、その経験のなさから容易にトラブルが起きることも想定できる。そこで、これまでの情報モラル学習を踏まえ、SNSの利用で適切なコミュニケーションについて考え、望ましい人間関係の育成を目指すことを目標として、本題材を設定した。

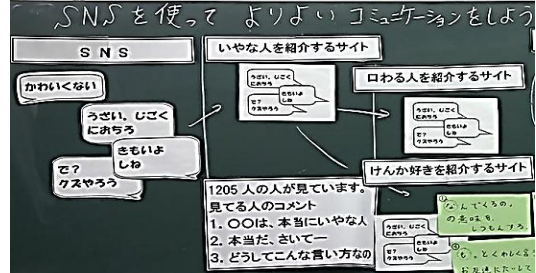
学習場面ア 「仕組みの理解」を学習する場面

授業では「仕組みの理解」のうち、特に「非対面性」について焦点をあてた学習場面を設定した。授業の前に「SNSのコミュニケーション」についてプレゼンテーションで実際に起こりうる場面を設定し、アンケートを行った。すると、相手に対して、感情的にコメントを送ってしまった児童がほとんどであった。そこから、その後、相手に送った自分のコメントが、インターネット上で記録が残り、広まってしまったという展開である(資料9)。視覚的な理解をねらって黒板を構造的に活用した結果(資料10)、本授業で焦点をあてたSNSの特徴である「相手の顔が見えないから、感情的になりやすい」ということを実感させ、「仕組みの理解」を考え、理解させることができた。児童の発言からは「仕組みの理解」のうち、非対面性の特徴としては「相手が見えない」「声が聞こえない」、その他の特性としては「見られる」「広まる」「消せない」「残る」が発言され、前回の検証授業の既習事項として「仕組みの理解」の定着も見ることができた。

資料9 SNS利用場面での仕組みの理解



資料10 黒板を構造的に活用



学習場面イ 【集団で考える】「日常モラル」と「仕組みの理解」を組み合わせる考え、判断する学習場面

本実践では、集団で考える場面として、「非対面では、どうして誤解が生じたのか」という原因を考え、「どのようにすればよかったのか」について話し合いを行った。すると、日常モラルとしては、「相手がなぜそんなことを書いたのか、よく考えて」、「もう一度丁寧な言葉で、一回謝って仲直りしたら」等、仕組みの理解では「書いたものは消せないよ」「ちょっと待って公開するの!？」等の適切な記述が見られた。SNS利用場面の状況に応じた判断力の高まりにつながる場面設定ができたといえる。

学習場面ウ 【個人で考える】本時の学習をもとに、自ら主体的に判断する学習場面

SNS利用の事例から、「友達と遊ぶ約束をする場面で、大きな誤解をされてしまった仲間にアドバイスをする」という場面を設定し、そこではどうすればよかったのかを自ら判断する学習を行った。

資料11に示したように、多くの児童からは、日常モラルを考えて「今度からは返事を返す前に、よく考えてね! 同じ言い方でも違うのもあるからね!」というコメントや、仕組みの理解を踏まえた「今度からはもう一度聞き直して、受話器を置くまで待つか、電話で直接聞いたほうがいいよ。その方が確実だし、争いも起こらないから」というコメントを見ることができた。しかし、一方で少数であるが、資料11のC4のように、「日常モラル」と「仕組みの理解」の両方を組み合わせて考えているコメントも見られた。

資料11 自ら主体的に考え判断した児童の記述

C1	SNSはトラブルを起こしやすいから相手の気持ちを考えてしんちょうにあつかおうと思った。
C2	相手の気持ちを考えることが大切なんだと思った。
C3	会話の中で、ケンカがおこった時に「どうしたらいいか?」がわかって良かったです。
C4	メールなどをするとき、言葉づかいにきをつけて、相手にわかりやすく、絵文字などをつけるようにする。残っていやなことはかかないようにする。
C5	SNSにのせるときは、もっと意味をくわしく書くようにする。
C6	SNSは相手の気持ちが、わからないからケンカになりやすい。

(3)-①C 中学校2年生授業実践1

【題材】 SNSの使い方を考えよう

【題材設定の理由】 学級の雰囲気として個性豊かで明るく元気な反面、周囲の環境に影響されやすく自己中心的な行動も見られる。SNSの利用実態としては、女子の9割が利用し、男女合わせると学級では8割以上がSNSの利用経験がある。その現状を踏まえ、SNSの危険性を上げるだけでなく、主体的に責任をもって判断し、行動していく力を養うことを目標とした、題材を設定した。

学習場面ア「仕組みの理解」を学習する場面

生徒の SNS の利用実態の多さと、これまで既習の情報モラル指導（昨年度、SNS についての危険性を学習、道徳の時間で情報モラルに関する資料を扱っている等）を踏まえ、資料 11 のような事前学習を行った。その内容は、SNS を利用した最近の事件をもとに、その行為が間違っている点を「日常モラル」と「仕組みの理解」について記入し、その理由を書くという内容である。回答として、「日常モラル」の間違いを理由として答えている生徒がほとんどであった。「仕組みの理解」で答える生徒はわずかにいた程度であった。

このことを踏まえ、日常モラル以外には、どのようなことが、なぜ間違っているのか考える学習を行った。学習方法として、事前学習をもとに、グループ活動で、なぜ間違ったのかという点を考え深めた。さらに既製のプレゼンテーション（[株]グリーン「事例に学ぶ情報モラル」）を活用した。関心をもち「仕組み」を理解しようとする生徒の様子から、この学習が有効であると考えた。

学習場面イ【集団で考える】「日常モラル」と「仕組みの理解」を組み合わせて考え、判断する学習場面

本実践では、仮想の SNS テキストチャットを作成し、「中学の後輩から、先輩が相談を受ける」という場面を想定し、考え判断させる実践を行った（資料 13）。

その場面での相談内容は、次の 3 つである。

- ①「SNS で伝えたいことがうまく伝わらずに、友達に誤解されケンカしました。どうすればいい？」
- ②「ネットで知り合った友達から写メ送ってと言われたけど、怖いから友達の写真を送りました。これってダメですか？」
- ③「友達と撮ったプリクラがかわいいから、ツイッターにアップしたんだ。そしたら友達に勝手にアップしないでって、言われちゃった。かわいいから見てほしいだけにひどくない？」

どの相談にも、「日常モラル」と「仕組みの理解」で考え、判断している回答がほとんどであった。例えば、相談①に対しては、「誤解されているんだったら、電話とか、直接会ったりして、うまく説明をすれば良いと思う。」と非対面性を踏まえた回答が多く、相談②に対しては、「友達に許可をとらないで勝手に使うのはよくないよ」と日常モラルを踏まえた回答や「個人情報にネット上で広まって、友達が危ない」と仕組みを理解した回答が見られた。相談③では、「ひどくない。プリクラだって書き込みや写真を勝手にアップしたら、その瞬間に色々な人に知られるからそれはダメだと思うよ。」と、日常モラルと仕組みの理解を組み合わせて考え、判断した回答が多かった。これらの反応から、本時の学習が判断力の高まりにつながったと考える。

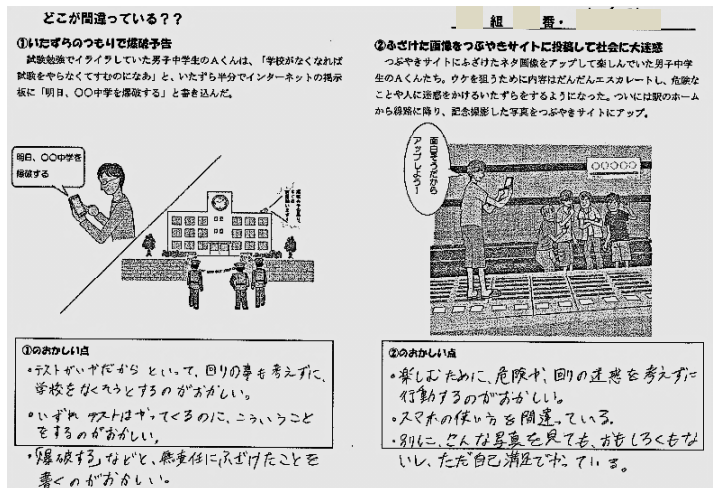
また、本時だけではなく、情報モラルについて、日常生活の中で仲間から学んだり、家庭で学んだりしている内容がいかされていることも考えられる。生徒のワークシートの記述から、情報モラル指導を繰り返し積み重ねていく大切さを実感した場面であった。

学習場面ウ【個人で考える】本時の学習をもとに、自ら主体的に判断する学習場面

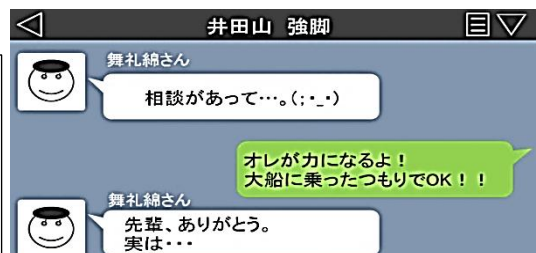
「これからどのようなことに気をつけて、よりよく SNS を使っていきたいか」という課題を設定した。生徒の記述の中には、次のようなものがあった。

- | | |
|----|---|
| C1 | ネットにアップするということは、世界中のすべての人に知られるということを知ってから、使おうと思った。また、個人情報が流出しないようにしっかり考えてからやろうと思った。 |
| C2 | SNS は便利なものだが、使い方によっては迷惑がかかるものもあるので、場によって使い分けられればいいと思う。 |

資料 12 事前学習で行ったワークシート内容



資料 13 仮想の SNS テキストチャット



C3	スマホの世界だけではなく、日常的な場面でも、周りの迷惑などをしっかり考えなくてはなと思った。いずれ使うことになるだろうから、しっかりと考えて使いたい。
C4	SNS はとても便利だけど、こわい部分がたくさんあると改めて分かりました。使い方をよく知り、あとのことを考えて SNS を使いたいと思いました。
C5	LINE とかツイッターとかでの人間関係にはしっかり、注意していこうと思った。また、情報は一度出すと消せないから、管理をしっかりすることが大切だと思った。SNS が悪だというわけではないと思うけれど、危険はたくさんひそんでいるので、気をつけたい。
C6	楽しいことや、うれしいことなどを SNS で共有するのはいいと思うけど写真などをのせるときは、ちゃんと確認をしてやらないと、大きな事件に発展することもあるのであぶない。

C1 は仕組みの理解を考え、C2・C3 は他人の迷惑という日常モラルで考えている。特に、C3 は日常から意識して生活をしていきたいという記述から、特に本時の手立てが、判断力の高まりにつながったと考えられる。また、C4・C5・C6 はともに、何が正しいのかダメなのかの判断の区別がはっきりしている記述である。日常モラルと仕組みの理解を組み合わせるようになってくると、SNS を利用するために必要な判断力が育ってくる。クラス全体を通して、SNS は使ってはいけないものだとの否定的にとらえている生徒はおらず、よりよい利用法を考えるという方向性で指導してきた結果だと考える。

(3)-②C 中学校 2 年生授業実践 2

【題材】 目指せ！ SNS マスター！

【題材設定の理由】 日頃の活動や行事で多くの生徒が力を発揮し、学級としても成長している。互いに成長させる手段としても情報モラルの授業を通して目指したい。それらを踏まえ、本時はこれまでの SNS に焦点をあてた既習事項を生かして、生徒自らの力で判断する場面を設定した授業内容とした。SNS のプラス面とマイナス面をトレードオフという視点で捉えさせ、協働して学習課題を解決していくことで、情報社会を生き抜くための判断力を育てることを目標とした、題材を設定した。

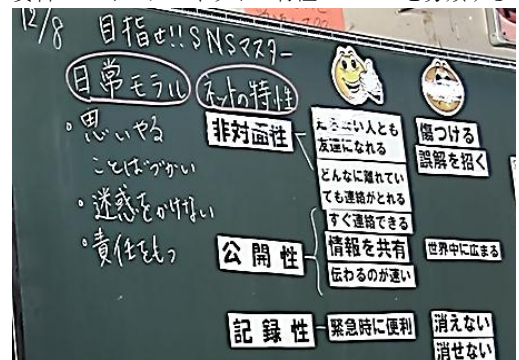
学習場面ア 「仕組みの理解」を学習する場面

既習の情報モラル指導（7月と10月にインターネットの特性を学習）を踏まえ、事前アンケートを実施した。アンケート内容は、「SNS でのコミュニケーションでのプラス面、マイナス面を考える」ものである。その両面を考えさせることが、判断力の育成につながるのではないかと考えた。その回答としては、プラス面では、「連絡が取れる」が最も多く 28 名/34 名で、次には「情報共有し、情報が得られる」が 10 名/34 名であった。また、マイナス面として仕組みの理解に関する既習事項である「非対面性」が 13 名、「記録性」が 8 名、「公開性」が 6 名、「流出性」が 5 名とほぼ全員が、仕組みの理解に関する内容について記述をしていた。このことから、教師が情報モラルを日常から扱い、繰り返し指導することで、児童生徒の情報社会を生き抜くために必要な「日常モラル」と「仕組み」を用いて判断する力の定着につながっていることが分かった。

事前アンケートを踏まえ、仕組みの理解を実感させる手立てとして、板書を工夫、既製の映像教材（「指導の手引」）を活用した。インターネットの特性のうち「公開性」「記録性」を、映像教材を用いて確認した。その後、既習事項である非対面性や、公開性、記録性などがプラス面、マイナス面について、主体的に生徒から発言される様子があった。

このことから学習場面アにおいて、インターネットの特性のプラス面、マイナス面の両面を考えさせることは、仕組みを生徒に実感させる学習方法の一つとして有効ではないかと考える。一方で、一つ一つのインターネットの特性の意味をそれぞれに、分類し、単純に分けることは困難であった（資料 14）。これは、インターネットの特性の意味がそれぞれ重複するものがあるからであると考え。そこで、今後は仕組みの理解のとらえ方を「非日常性」のような小さくくりとして、とらえさせる必要があると考える。

資料 14 インターネットの特性一つ一つを分類する

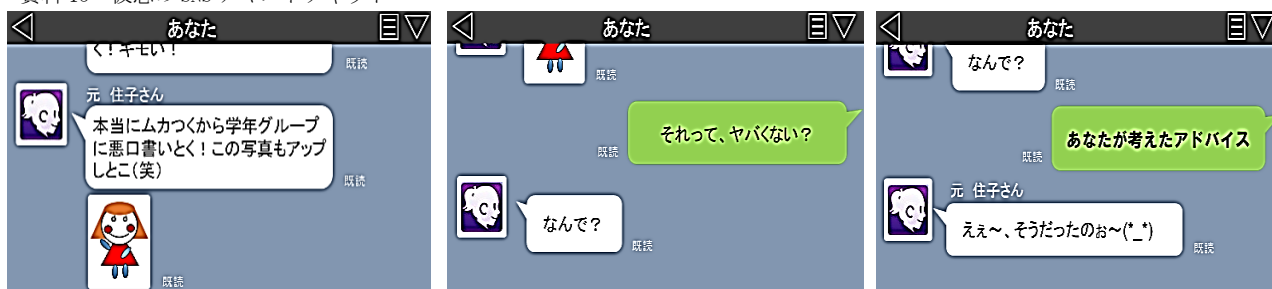


一方、指導する側としては、仕組みの理解の区別を明確にとらえている必要があるといえる。なぜなら、これらを1年に1度の学級活動の授業では、習得が難しいことが考えられるからである。扱う内容によっては、1年間の授業をサポートする「どこで表」の実践や、各教科等の学習活動全体の中で、どの特性を指導する必要があるかあらかじめ考えておき、計画しておくことが大切になってくる。そのことを担任自身が、仕組みの理解の区別について、明確に把握しておくことが判断力を育むために必要であると考えられる。

学習場面イ【集団で考える】「日常モラル」と「仕組みの理解」を組み合わせる考え、判断する学習場面

仮想の SNS テキストチャットを作成し、考え判断する場面を想定した実践を行った。場面は、「友達が、悪口を他のグループの SNS に転送しようとしている行動に対して、アドバイスをする」というものである（資料 15）。アドバイスは4人グループで話し合いのもとに考え、判断する学習を行った。

資料 15 仮想の SNS テキストチャット



アドバイスの回答として、以下のようなものがあつた。

- C1 「ネットにあげちゃうと、世界中の人たちに見られて自分でも消せないんだよ。そしたら、私たちが将来就職するときにも影響が出ちゃうんだから。」
- C2 「ネット上では非対面性があり、自分が思ったよりも無礼綿さんのイメージがきつくなるかもしれないから。」
- C3 「写真をアップしてしまうと、伝わるのが速いため、すぐに他人に広まってしまうから、やめた方がいい。」
- C4 「思いつきでアップしたら関係が無い人にもしれわたっちゃうじゃないか。ムカツくなら本人と話して解決すればいいと思う。」
- C5 「うーん、ムカツくのも分かるけど、そういうことはいやなら本人にも言うべきだよ。それに、同じように元住子さんがやられたらきついやでしょう? やめた方がいいよ。永遠に残っちゃうからいつか後悔する日がくるわー!」
- C6 「無礼綿さんの悪口をいっちゃったら、自分が悪人になるかもしれないし、次は自分が悪口をかかれてしまうかもしれない。無礼綿さんが見れないといっても、誰かが、相手に伝えちゃうかも。」
- C7 「書かれた人を傷つけてしまうし、自分が同じことをされたらあなたもイヤでしょ。」

どの回答にも、「仕組みの理解」を中心にアドバイスしたものが多かった。おそらく、自分の身に置き換えてみると、「仕組みの理解」でアドバイスした方が、友達の行為に説得力を増すと判断したためだと考えられる。C7は、特に日常モラルに触れて、「自分だったらどうするのか」と相手の気持ちを考えることを促し、上手に相手に伝えている。これは、SNS の判断基準として欠かせないものである。仕組みの理解とともに、「相手の気持ちになって考える」という日常モラルは、自分が状況判断する場面になったときに、考え、判断する時に生きてくるのではないかと、記述から推測できる。

学習場面ウ【個人で考える】本時の学習をもとに、自ら主体的に判断する学習場面

本時の終末の振り返り場面で、「これからどのようなことに気をつけて、よりよく SNS を使っていきたいか」と発問した。生徒の記述の中には、次のようなものがあつた。

- C1 「ネットの特性は、消せないとか知らない人にも伝わるのが速いなど、身近にあるネットに関してもわからないことばかり。日常モラルを日々気にしながらネットを使わないと大変なことになることがよくわかったので 2 つのことを中心に使っていきたい。」
- C3 「悪口を書かない。相手の事を考える。日常モラルと同じで SNS も思いやりをもって使う。」
- C5 「文字だけじゃ伝わらないこともあるから、日常と画面をしっかりと使い分けて使用する。」
- C6 「SNS などでは、ちょっとした書き込みで、誤解されてしまうかもしれないし、大ごとになっちゃうかもしれないから、相手のことを考え、自分の発言（行動）した一つ一つに責任をもつことが大事だと思う。」

どのコメントも、日常モラルと仕組みの理解を組み合わせる考えが SNS 利用では、大切であ

ると記述している。これらの記述から、指導の手立てが判断力の育成に有効だといえる。日常モラルと仕組みの理解の両方に関する記述は、34名中21名と学級の61%であった。このように日常モラルと仕組みの理解を組み合わせて考えられるようになってくると、SNSを利用するために必要な判断力育成につながると考える。

C7「楽しんだりするためにつくられたものだから人が嫌になることはせず、相手のことを考えて使って、お互いが楽しめるような使い方をしたい。」
 C8「思いやりを第一に考えて、必要なこと以外を聞かないようにすればより良く利用できると思う。」
 C9「できるだけ悪口などをアップするようにして使用するのではなく、もっと、便利になるように使えるように、してあげたいなと思いました。」

また、C7・C8・C9のように、よりよい使い方をイメージして書かれた記述の中で、1名の生徒が「あまりSNSを使わないようにする」と記述したが、その生徒以外はすべて「よりよい使い方」に関する記述であった。このことは、学習場面で意識した「ダメダメ指導から、考え判断することでよりよく使う指導」を継続した結果といえる。

C10「ネットも日常モラルと同じで、思いやりや責任を持って使えば良いと思う。ネットはとても便利なものだから、上手に使えば良い。」
 C11「やはりネットの特性をしっかりとっておきたい。メールやSNSは使う時は相手の気持ちやその後のこと（思いやり）も考えて使えれば良いと思った。日常モラルもSNSも同じ！！」
 C12「日常モラルもネットも気をつけることは同じなので、特に気をつけなくても当然できることだと思う。」

C10・C11・C12の記述にあるように、情報モラルの授業を繰り返し実践することで、「日常モラル＝ネットの世界」のように生徒がとらえるようになってきた。このように、ネットの世界は、日常と同じで相手の状況を考えて、思いやることを理解してくると、判断力の高まりにつながると考えられる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究から見えてきたこと

(1) 「日常モラル」と「仕組みの理解」をもとにした指導による判断力を育むことの有効性

検証授業を行った小中学校では、アンケート項目で判断力の育成につながる記述を累計した数値の向上が明らかとなった（表7）。

一方で、小学校3年生では、「どのように利用したら有効に使えるか」という項目の記述を累計した数値が若干下がっていた（表8）。小学校3年生は、何に対しても素直な気持ちで接する時期であることから、「SNSは少し危険な面もあることから、今は使うのをやめておこう」と回答したと考えられる。そのような回答はあったものの、7回の検証授業における児童生徒の様子から、実社会においても状況に応じた判断ができるものと考えられる。以上のことから、日常モラルと仕組みの理解をもとにした指導は、情報社会を生き抜いていくための判断力を育む上で有効であると分かった。

(2) 「不易」を指導することで、誰でもできる情報モラル教育としての可能性

物事を判断するためには「判断基準」が必要である。情報モラル教育においては、「不易」の部分である「日常モラル」と「仕組みの理解」を組み合わせて考えさせることが判断基準となる。「不易」を指導することは、「最新の情報端末やサービスを理解しようとしているが、その理解が追いつかない」

表7 児童生徒に行った検証授業前後のアンケート①（一部）

質問項目	対象（人数）	授業前	授業後
「SNSを使うときに、どんなことに気を付けたらよいと思いますか。」	小学校3年生（34）	7	24（+17）
	小学校4年生（23）	4	19（+15）
	中学校2年生（34）	27	33（+6）

表8 児童生徒に行った検証授業前後のアンケート②（一部）

質問項目	対象（人数）	授業前	授業後
「LINEなどのSNSを、どのように利用したら有効に使えると思いますか。」	小学校3年生（34）	26	24（-2）
	小学校4年生（23）	18	22（+4）
	中学校2年生（34）	30	32（+2）

「何をどのように指導したら良いのかわからない」と、今まで情報モラル教育に一步踏み出せなかった教師に自信を与えることにつながる。児童生徒に身近に接する担任が学級の実態に応じた「不易」を踏まえた情報モラル教育を行うことで、授業展開や児童生徒の支援の方法もより効果的にできると考える。

以上のことから、情報モラル教育は外部講師の授業だけに頼りがちであった現状を改善し、流行を追わず不易の指導をもとに、誰にでも情報モラル教育が可能となったといえるのではないだろうか。

(3) 情報モラルは「日常モラル」を土台として、「仕組み」を理解させること

SNS に焦点をあてた指導について、検証を通して一つの共通点に気付くことができた。それは、「日常モラルの習得が不十分な児童生徒は、SNS を利用する上でのモラルも不十分であり、正しい判断に影響が出てくる。一方で、日常モラルが身につけている児童生徒は、インターネットを通しての判断にもトラブルが少ない」ということである。我々教師は、普段から教科指導、道徳の時間、児童生徒指導、人権教育等を通して、日常モラルを指導している。それらが、情報モラル教育の土台となり、「情報社会を生き抜くための判断力の育成」につながっていくと実感した。このことは、検証授業を重ねる中で、児童生徒のワークシートの記述や授業中の発言等で「日常モラルと SNS で必要なモラルは同じ」とあったことから明らかである。「日常モラル」を土台として、「仕組み」を理解させ、考え、判断させる学習を展開することで、判断力の育成につながる。

2 今後の課題

(1) 発達段階に応じた情報モラル教育

小学校中学年における検証授業では、授業者は「仕組み」の一つである「非対面性」の指導が難しいという課題が残った。その原因として、児童の発達段階から、「相手が見えない状況」を想像することが困難であると考えられる。従って、小学校低学年から中学年までの情報モラル教育は、「仕組み」を理解させるとともに、より一層「日常モラル」を育てることが大切である。今後は、小学校低学年や中学年の発達段階に応じた情報モラル教育の研究と、実践を積み重ねる必要がある。

(2) 「道徳の時間」での情報モラルの扱い方

学習指導要領解説道徳編では「情報モラルを道徳で扱うこと」、「情報モラルに関する指導に留意する」こととしている。本研究では、中学校2年生の「道徳の時間」において情報モラルに留意し検証授業を行った。授業は、情報モラルを授業で留意して扱い、SNS の題材を通して、内容項目2-(1)「自分の言動に責任をもつこと」をねらいとした。授業終末の生徒の感想では、道徳の時間のねらいに迫った

表9 道徳検証授業後の生徒の振り返りの記述（一部）

道徳のねらいに迫った振り返り
「主人公は自業自得だと思った。けれども自分も言った言葉が最終的に自分に返ってくると思うから、日常から言葉に責任をもっていきたいと感じた。」
「主人公と同じように、今まで普段の言葉づかいが悪く、自分も悪口も言われてしまったから、友達と話す言葉づかいもちょっと意識しようと思った。」
SNS の使い方に偏ってしまった振り返り
「SNS はこわいと思った。」
「インターネットの特性がよくわかった。」
「LINE とかは便利なものになるけど、使い方を間違えるととてもこわいと思いました。」

記述が見られた（表9）。一方で、主人公の気持ちを考えて道徳のねらいに迫るよりも、「SNS の使い方」だけを学習したような生徒の記述もあった（表9）。これは、「SNS の正しい使い方」を中心に扱った授業内容であったことが原因と考えられる。以上のことから、道徳の時間で情報モラルを扱う場合は、道徳の内容との関連を踏まえて、情報モラルに関する指導に留意する必要がある。

(3) 年間及び小中学校9年間を見通した情報モラル教育の必要性

本研究では、年間に1～2回の学級活動における情報モラル教育によって判断力の育成を目指した。本来情報モラル教育は、繰り返し行うことで徐々に判断力の高まりがみられるものである。その方法の一つとして、本研究で考案した「どこで表」の活用が考えられる。そのために、学校教育全体での

取り組み方を検討することも必要となってくる。「どこで表」をもとに、特別活動年間指導計画を見直したり、教科等で情報モラル教育を取り入れたりすることも必要である。さらに、小中学校9年間を見通した継続的な指導が効果的である。小中学校9年間を見通した情報モラル教育により、効果的に判断力が高まっていく。

また、情報モラル教育を進めるにあたっては、保護者との連携が欠かせない。そこで本研究では、「学級便り」や「アンケート」等の活用を試みた。その結果、保護者のアンケートから、今後は、情報モラル教育実施後の指導内容等を、保護者に継続的に伝えることはもちろんのこと、小中学校9年間を見通した保護者との連携も課題であると考えます。

最後に、本研究を進めるに当たり適切なお助言をいただきました原克彦先生、玉田和恵先生、研究員所属の校長先生をはじめ、研究にご支援、ご助言をくださいました学校教職員の皆様に、心より感謝し厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

文部科学省	『小（中）学校学習指導要領解説道徳編』	2008年
文部科学省	『小（中）学校学習指導要領解説特別活動編』	2008年
文部科学省	『親子のためのネット社会の歩き方』	2009年
文部科学省	『ここからはじめる情報モラル指導者 研修ハンドブック』	2010年
文部科学省	『教育の情報化に関する手引』	2012年
J A P E T	『「情報モラル」指導実践キックオフガイド』	2007年
中村祐治 他	『日常の授業で学ぶ情報モラル』 教育出版	2008年
玉田和恵・松田稔樹	『3種の知識による情報モラル指導法の改善とその効果』	
	日本教育工学会論文誌	2009年
文部科学省国立教育政策研究所	『情報モラル教育 実践ガイダンス』	2009年
赤堀博之	『道徳授業の定石事典・確かな指導観に基づく授業構想』 明治図書	2010年
グリー株式会社	『事例に学ぶ情報モラル 指導の手引』	2011年
原克彦・玉田和恵 他	『情報化社会の新たな問題を考えるための教材～安全なインターネットの使い方を考える～指導の手引き』 株式会社情報通信総合研究所	2014年
土井隆義	『つながりを煽られる子どもたち』 岩波ブックレット	2014年
玉田和恵・松田稔樹	『教師が修得すべき情報モラル指導内容の検討』 江戸川大学	
	情報教育研究所	2014年

【指導助言者】

目白大学社会学部メディア表現学科教授（川崎市総合教育センター専門員）	原 克彦
江戸川大学メディアコミュニケーション学部情報文化学科教授	玉田 和恵
川崎市立小学校情報教育研究会長（川崎市立有馬小学校長）	中田 浩彰
川崎市立中学校視聴覚放送部会会長（川崎市立今井中学校長）	前川 稔
元川崎市立小学校情報教育研究会長	石堂真理子
川崎市総合教育センター指導主事	熊谷顯太郎